

| | |
|--------------|---|
| Title | ディスカッサント発言2 : 韓国から |
| Author(s) | 曹, 銘根 |
| Citation | グローバル日本研究クラスター報告書. 2018, 1, p. 29-30 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/68048 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ディスカッサント発言2：韓国から

曹 銘 根

私は、文学研究者ではなく韓国近代史の研究者ですので、その観点からコメントしようと思います。私にとって「原爆文学」は、不慣れなテーマです。韓国では関連研究も少ないです。このコメントでは、現在私が抱いている疑問について質問することにします。

①「被爆」の認識において韓国と日本は葛藤関係にあるのか？

報告のなかで、韓国では原爆によって日本が降伏したため原爆を人類普遍の問題として受け入れていないところがあるのではないかと述べられていましたが、その部分は少し誤解もあるように思われます。韓国人が喜んだのは、日本の敗戦による解放の喜びを感じたからであって、日本が原爆によって代価を払ったと考えたためではありません。もしも、そのような認識があるとすれば、それは論理的な飛躍だと考えます。当時、韓国の独立を願っていた韓国人たちは当然日帝の敗北を願いましたし、アメリカの原爆投下はその日帝の敗北を早めた処置の一つと考えています。しかし、日本の悲劇と韓国の解放とが葛藤関係を形成しているような二項対立的な構図で説明できるのだろうか、はたしてそれは両国間の葛藤なのか、という疑問があるわけです。日本の軍国主義が戦争中に行った数多くの民間人虐殺と蛮行が批判されるように、原爆によって犠牲になった日本人たちも同じく被害者であるという認識も一般的に存在すると考えます。

②韓国人被爆者の認識

韓国人被爆者たちは、基本的に「植民地支配がなかったら被爆することがあったらどうか。なぜよりによってその時広島や長崎にいたのだろうか」という考えを抱いたであろうと思います。さらに、だれも責任を負わない現実により一層絶望したことでしょう。「とくに日本と韓国の両政府の無関心に怒りを感じたのではないだろうか。はたして韓国人被爆者はだれをより怨むだろうか。植民地支配をした日本だろうか、原爆を投下したアメリカだろうか。あるいは、彼らを冷遇した韓国だろうか」という問いが湧いてきます。もし、被爆者手記などに、そのような問いにかかわる内容があるのであれば、彼らの認識を理解することができると思います。

また、李順基の場合、御庄博実との交流が彼の認識にどのような影響をあたえたのかが

もっと知りたいです。と同時に、御庄博実の作品に、李順基の体験や彼の自分史の告白がどのような影響をあたえたのかについても、もっと具体的な言及があればよかったですと考えます。両者の関係をたんに人間的な交流だけで説明してしまうのは物足りないような気がします。

③原爆文学に映るアメリカはどのような姿なのか

日本の一部の人は、原爆を日本人だけが被害を受けた唯一無二の体験として、その特殊性の観点だけから原爆問題を考えようとする被害者意識が強いように思われます。その結果、帝国主義と第二次世界大戦を引き起こした加害者としての反省を拒否します。と同時に、加害者であるアメリカにその責任を問う動きも活発ではありません。そこで、原爆文学ではアメリカがどのように扱われているのかについて知りたいです。とくに、御庄博実の場合、かれの故郷である岩国にはアメリカ海兵隊の基地が建設されましたし、第二の故郷と言える広島は被爆しました。加害者の軍事基地が故郷に建設されているのを見る御庄博実の心情がどのように表現されているのかが知りたいです。

最後に一言付け加えておきますと、原爆文学が 1945 年 8 月の被爆の問題だけを扱うのであれば、普遍性を獲得できるでしょうか。現在進行形の核戦争の脅威や原子力発電所をめぐる問題まで包括して扱うことが普遍性をより広げていく方法であるように考えます。以上です。ありがとうございました。